

千葉県立松戸向陽高等学校

「福祉マインド」の涵養 ～コロナ禍・拠点校としての模索～

1 目的と課題

(1) 本校の目指すもの

普通科と併設し、本県唯一の福祉教養科を有する高校である。県立学校改革推進プラン第1次実施プログラムの指定以来、福祉人材を育成する拠点校として「福祉マインド」の涵養を目指した教育活動を継承している。新しいスクールポリシー策定に向けた生徒への意識調査でも、身に付けたい資質に「基礎学力」を、卒業後の姿には「人や社会を支援する仕事で貢献したい」を1位と回答するのも、本校生徒らしい結果である。

本校での学びにより、厚生労働省認可の国家資格「介護福祉士」受験資格（福祉教養科）や「介護職員初任者研修」修了資格（福祉コース・福祉教養科）が取得できる。昨年度卒業生の「介護福祉士」合格率は97.1%（全国平均71.0%）を数え、生徒と教職員の真摯な取組みにより、年を追って着実に資格取得の実績を高めている。

(2) 社会に求められる福祉教育

厚生労働省算出の「2040年問題（高齢者人口の突出と介護人材の不足）」が社会的課題となる中、福祉人材を輩出する養成機関としての存在は一段と重みを増し、若者の福祉事業離れ防止に向けた啓発活動も大切な役目となっている。令和2年度からは高校における「通級による指導」の実践校と併せ、国立教育政策研究所から「令和2・3年度教育課程研究指定事業（高・福祉）」の指定を受けて研究を進めている。

(3) コロナ禍での課題

介護福祉士取得のため3年間で455時間（60日）に及ぶ校外実習が計画され、その5分の4以上の出席が必須となる。コロナ禍で令和2年度はすべて、本年度も大多数の施設での実習中止を余儀なくされた。教員からは「何とか校外実習を行いたい」という声が聞かれた。令和2年6月、介護福祉士等の養成に関する実習要件の緩和とICTの活用等が通知され、学びの保障に向けた工夫と新しい取組みの必要性が痛感された。どうやって相対的かつ現実的な学習環境をつくるかということが大きな課題となった。

また、資格取得のための実習に限らず、本校が目指す「福祉マインド」涵養の手段となる校外での諸活動の継続も、同様の課題を抱えた。

2 実践と工夫

(1) 対外的活動への参加

令和3年2月、厚生労働省補助事業「介護のしごと魅力発信事業」として実施された『にっぽんの要』に参加する機会を得た。福祉教養科の生徒5名の研究をもとに、「介護・福祉かえる委員会」の一員として「介護のイメージをかえる」提言を発表し、BSフジテレビで全国に発信され有識者等からの高い評価を得た。（写真 参照）

生徒の「福祉マインド」の涵養には、地域と連携した活動が不可欠である。本年度に入り、ボランティアや交流などの対外的な活動を可能な限り可能な形で再開し、本校らしい教育の骨格が失われないように務めている。一例としては以下のとおり。

・ボランティア部、JRC（青少年赤十字）部など

「第8回松戸市カローリング大会」運営と競技への参加。（写真 参照）

「チューリップ栽培」市社会福祉協議会と連携し福祉施設へ届ける企画に参加。

「県立松戸特別支援学校との交流」ZOOMを用いて年間9回の交流実施。

(2) 実習での工夫

福祉教養科においては、習得しなければならない技能を身につけるため、感染症対策を徹底した上での校内実習継続が図られた。（写真 ・ 参照）

また、これまで実習を通じて結ばれてきた関係施設には、豊富な経験に裏付けられた知識・技能を持つ介護職員が存在する。これらの人材に講師を依頼し、講義形式での実習にも取り組んだ。(写真 参照)

さらに、少しでも施設に赴いた実際的な対人の実習に近い状態を模索するため、オンラインでの双方向同時通信を積極的に取り入れる実践を試みた。これには施設側の理解と施設利用者の許諾を得る必要があり、要請や折衝に困難を伴った。介護職における後継人材の育成という観点から、理解と協力を示してくれた施設に深く感謝している。実習内容の一例としては、以下のとおり。

現場で介護福祉士が行う介護の実態や必要な専門知識を、映像と解説によって学ぶ。
(写真 参照)

各生徒が施設利用者の担当を受け持ち、施設職員と相談しながらコミュニケーションの取り方を学ぶ。(写真 参照)

担当する利用者の状況に応じて生徒が介護計画を作成する。その計画に基づき、施設職員がリアルタイムに生徒と応答しながら実際の介護を行いつつ、指導助言を与えてくださるといった実習も行った。(写真 参照)

実習で結んだオンラインを活用し、七夕の頃には生徒と施設利用者が互いに短冊を記し施設の竹に結ぶなど、立体的な取り組みも工夫した。1年生の実習では、単元のまとめにポスターセッションを行い、学びの手法に工夫を凝らした。(写真 参照)

「介護技術コンテスト」(県大会・関東大会)等についてもリモートでの運営を試み、本校を含む各校の参加を得て、日頃の学習成果を発表する機会に結び付けた。

新たな学びの在り方を模索する中で、「超高齢化社会における社会的孤立」をテーマとした「コミュニティ・コーピング」を用いたゲーム形式での実習(写真 参照)には市社会福祉協議会の参観もあり、共同通信社他の取材を得た。生徒からは「現実に寄り添った介護が学べる」とう感想が聞けた。

また、「VR体験」実習では、VRゴーグルとヘッドホンを着用して認知症のメカニズム等を疑似体験した。この実習には市社会福祉協議会や近隣福祉施設の職員等が生徒とともにVR実習を体験し、福祉新聞社等の取材を受けた。参加した生徒からは、「階段を下りるだけなのにビルの屋上から飛び降りるような恐怖を体験した。実際に認知症を実感できて勉強になった」といった感想が寄せられた。(写真 参照)

現在は高大連携を結ぶ大学と相談し、栄養学や看護学などの高度な専門性を福祉教育に応用するための講座の開設を検討している。

3 成果

(1) 顕彰と報道

令和2年10月 文部科学大臣「特別奨励状」

産業教育諸学校への激励も含め、文部科学大臣から特別奨励状が授与された。

令和3年2月 BSフジテレビ「にっぽんの要」

福祉教養科の生徒5名が、BSフジテレビを通じて提言を発表し放映された。

令和3年7月9日 毎日新聞

コロナ禍におけるICTを学びに活用している事例として紹介された。

令和3年8月 千高教研究福祉教育部会「優良賞」

「関東地区高校生介護技術コンテスト千葉県予選会(研究発表)」で表彰された。

令和3年8月 共同通信社取材、東京新聞・千葉日報・信濃毎日新聞・沖縄タイムス
コミュニティ・コーピング(ゲーム形式)を用いた学びの手法が報道された。

令和3年10月 千高教研究福祉教育部会「最優秀賞」関東大会出場

「関東地区高校生介護技術コンテスト千葉県予選会(介護技術)」で表彰された。

(2) 反響と成果

対外的活動

コロナ禍以前には絵本研究部の創作絵本読み聞かせ訪問による交流があった保育園児たちが活動再開を待望していることを、「開かれた学校づくり委員会」の席上で伝えられた。ビデオレター形式など、実践可能な方法を工夫し活動を模索していきたい。

また、本校の校外諸活動再開への希望と、市社会福祉協議会の地域連携福祉活動の再開がリンクし、チューリップを育てて福祉施設等へ送る企画への誘いを受けた。以前から市社協と関係の深かったJRC（青少年赤十字）部中心に活動を開始した。

福祉教育でのオンライン実習と学びの工夫

ア 生徒への影響と反応

生徒は新聞社の取材に、「オンラインの活用を通じた実習には相手の反応があり、とても緊張感があった」と回答している。コミュニティー・コーピングやVR体験でも相対的な実習が現実にも即したものであることを強く認識していた。コンテストへの参加も、日頃の学習成果を発表する機会を得て励みとなっていた。

イ 拠点校として

オンラインを使った実習に、福祉コースを設置する県内の高校から学習方法を学びたいとの依頼もあり、施設側の承諾を得て「オンライン見学」を実施するなど、福祉教育拠点校としての機能を果たすという意味でも効果的な取組みになった。

実習や学びへの新たな取組みや関係機関との連携が新聞等で複数回報道されたことも、福祉教育の在り方を広報するよい機会になった。

ウ 互恵的關係

施設利用者にとっても、コロナ禍で家族にさえ会えないという孤立的な状況もあり、高校生とのつながりに「毎日話ができ楽しい」という声をいただいた。高校生の学びに役立ち「社会に参加している意識」を生んでいるという、互恵的な相乗効果の起きたことが施設の方から伝えられた。本校にとっても喜びである。オンライン活用に積極的な施設も増え、生徒の実習機会と学習の幅が広がった。

また、松戸市特養連絡協議会から連絡をいただき、学習支援、ボランティア、広汎的福祉活動の協働という3点について、一層の連携強化の申し入れを受けた。

4 今後の方向性

コロナ禍に限らず様々な社会状況を受け止め、諦めずに新しい一手を考え続けることが肝要である。今年度、より有効な連携を求めて、地域の福祉関連施設の方々と様々な相談する機会を得たことは、今後につながる大きなメリットになった。ICT活用の工夫による実習を構築したことで互恵的相乗効果が見られ、施設や地域福祉にとってもプラスの要素となったことは、本校の学びが社会に与える意味を改めて気づかせてくれた。

また、近年注目を集めている学習活動、「コミュニティー・コーピング」や「VR体験」を実習に組み入れたことも、生徒が幅広く体験、思考するきっかけとして大きな収穫になっただけでなく、新たな学びの方向性を模索するヒントになったと言える。

コロナ禍の逆境にある中で挑戦した今年度の取組みが、新学習指導要領が目指す、「予測困難な変化に対応し、自ら課題を見つけ、学び」、「協働して考え、判断して行動する」といった、「生きる力」の育成に資するとともに、コロナ禍と切り離しても新しい学習の在り方として有効性を持つことが実感された。

感染症の終息はまだ見えず、台風や大雨による災害への危険も高まる今日である。その中で学校教育活動を安全に充足させる工夫と努力は、今後とも重要な課題である。

今後はさらに施設や人材など地域の教育資源と結び付きながら、相対的かつ現実的な学習環境の整備に努めていく。高い専門性を基軸とした「福祉マインド」を涵養し、地域に有用な人材を還元できるよう、福祉教育拠点校としての役割を推進する。そうした教育活動の中で本校の魅力を発信していくことが、ますます大切であると考えている。

5 内容に関する写真等

(1) 対外的事業への積極的な参加



厚生労働省補助事業「にっぽんの要」
* 「介護・福祉かえる委員会」発表
<https://www.youtube.com/watch?v=GGLioOgaWJM>



「松戸市カローリング大会」参加
* 運営から競技まで行った。

(2) 福祉実習への工夫



校内での「喀痰吸引」実習
医療的ケアは必須であり技術習得が求められる
接触には特に最大限の感染予防と配慮を尽くしている



校内での「アロマタッチ」実習



講義形式での模擬「ケアカンファレンス」の実習
* 多職種連携について特別養護老人ホームの職員に学んだ風景
今後も高大連携を結ぶ大学と「栄養学」をもとにした講義等が予定されている





「認知症ケア」の実習

は、グループホーム等とオンラインで結んで学んだ風景
では、施設利用者とのコミュニケーションの取り方を学んでいる



施設利用者との対話実習（学校側）



オンライン実習（施設側）

では、生徒が計画したケアをリモートで実際に声がけて実践している
* コロナ禍中にICTを学びに活用している事例として毎日新聞に掲載された
は、ポスターセッション準備のため資料を整理している風景



ポスターセッションの準備



「コミュニティ・コーピング」実習

では、超高齢化の地域社会をテーマに課題解決の方法を探るゲーム型の新しい
学びとして、共同通信社・産経新聞等に取材を受けた
東京新聞・千葉日報・信濃毎日新聞・沖縄タイムスに掲載された（9月現在）
一般社団法人コレカラサポートのホームページで紹介された

<https://comcop.jp/news/activity0803.html>

は、VRゴーグルとヘッドホンで、「認知症のメカニズム」と「看取り」を疑似
体験し、福祉新聞に取材を受けた（今後掲載予定）



「VR体験」実習

【 広報・報道状況 】

1 「日本の要」

BSフジで放映（令和3年2月） <https://sankeikaigofukushi.com/>

介護・福祉の“いま”を学び、“これから”を
あかるく・前向きに・自分ごととして考えます！



↑ YouTubeでも配信されている

<https://www.youtube.com/watch?v=GGLioOgaWJM>

2 「オンライン実習（福祉教養科）」

↓ 毎日新聞への掲載（令和3年7月9日）の電子記事

■ 松戸向陽高：高齢者とオンライン会話 介護人材を養成、松戸向陽高 施設が協力、リモート実習 / 千葉

2021/07/09 毎日新聞 地方版 23ページ 1104文字 [+](#) その他の書誌情報を表示

介護人材を養成する県立松戸向陽高校（松戸市）が、コロナ禍でも生徒に実習で知識や技能を身につけてもらおうと、今年度から介護施設とオンラインでつないだ「リモート実習」を始めた。感染リスクなどから昨年以降実施が困難だった施設での実習が、身体接触などを伴わないリモートによって可能になった。福祉系の教育機関でのリモート実習は珍しいといい、同様の課題を抱える他校の参考になりそうだ。

「仕事の後のお酒は最高でしたか？」「若いころは食欲が旺盛でしたか？」――。6月16日にあった福祉教養科3年生のリモート実習。教室の黒板に映し出された高齢男性に対し、女子生徒2人が次々に質問した。

男性は市川市内の特別養護老人ホーム「サンライズ市川」の80代の入居者。自室にカメラを据え、高校生と対面した。男性は認知症患者だ。2人は約30分間、男性が旧築地市場（東京都中央区）で働いていた話などをした後、介助の男性の手を借り、ベッドに横たわる様子を見守った。他の生徒たちもメモを取りながら注視した。

高齢者とのコミュニケーションは、その人に合った「介護計画」を立てるための大切な情報収集の機会となる。2人は実習後「自然な会話にするため、相づちを繰り返さないように心がけた。校外実習は2年ぶりだったので、慣れずに緊張した」と話し、表情を和ませた。

福祉教養科（定員40人）は県内唯一の福祉専門学科だ。卒業前に介護福祉士の国家試験を受験し、資格を取得。2020年度の合格率は全国平均の71%に対して97・1%に上る。施設で行う介護実習は3年間で455時間（60日）に及び、介護福祉士の受験資格を得るためにはその5分の4以上の出席が必要となる。しかし、昨年はコロナの影響で施設実習ができなかった。

幸い、国が代替措置を認めたため、同校は実物大の人形を使って着替えやおむつ交換、入浴の訓練を続けたが、高齢者と相対する機会は失われた。そこで、関係施設にリモート実習への協力を呼びかけたところ、この施設が引き受けてくれたという。施設の担当者は「生徒の学びの機会がコロナ禍で減ってほしくなかった」と打ち明ける。担当の鈴木恭太教諭は「実施には、施設の利用者やその家族、同じフロアの入居者らの許可を得なければならない」と話し、負担が増す施設側の理解が必要との認識を示す。

荒井俊郎校長は「画面を通して、高齢者と多数の生徒がリアルタイムで会話ができるのは効率的。本校の生徒が先生役になって、小中学生に行う福祉の授業をリモートで実施することもでき、人材確保にもつながる」と期待している。【橋本利昭】

■写真説明 施設の高齢者と画面を通して行われたリモート実習



← 毎日新聞に掲載された写真
(令和3年7月9日)

3 「コミュニティコーピング（福祉教養科）」

信濃毎日新聞・沖縄タイムス・東京新聞・千葉日報への報道（令和3年8月）
一般社団法人コレカラサポートのホームページでも紹介（令和3年8月～）



← コレカラ・サポート
HP掲載写真
(8月～掲載)

<https://comcop.jp/news/activity0803.html>

の一般社団法人「コレカラ・サポート」が開発した「コミュニティコーピング」と名付けた

介護について学ぶ千葉県立松戸向陽高（松戸市）の福祉教養科の生徒が3日、超高齢社会を体験し、課題解決を図るゲームに授業で取り組んだ。同校では例年実施していたグループホームなどの校外学習が、新型コロナウイルスの影響でできなくなり、代替策としてゲームを取り入れた。

ゲームで超高齢社会学ぶ

千葉の高校生が実習



協力してゲーム「コミュニティコーピング」をする千葉県立松戸向陽高の生徒＝3日、千葉県松戸市（名札部分を画像加工しています）

と話し、

オンライン版もあり、コレカラ・サポートは定期的に体験会も開いている。千葉県一代表は「ゲームの内容は現実にも起きること。せむ生がしてほしい」と話し、

ーム。「コーピング」は「対処する」という意味で、参加者が協力し、地域住民の抱える悩みを解決していく内容だ。

「妻が病気で亡くなり、その後体調が優れず夜もなかなか眠れない（60代男性）」「障害のある息子と同居。自分が死した後はどうなるのか（70代女性）」など、具体的な悩みを抱える人がターニングポイントに現れ、参加者は訪問診療医やカウンセラーといった専門職の「処方カード」を使って解消していく。悩む人が一定以上残るとゲームオーバーになる。

授業ではボードゲーム版を使い、福祉教養科1年の生徒たちが5人1組で話し合いながら進めた。参加した笹本優生さん（15）はゲームを通して「寄り添った介護ができる」と満足そうだった。

← 沖縄タイムス
(8月7日掲載)

NEWS SQUARE



協力してゲーム「コミュニティコーピング」をする松戸向陽高の生徒。千葉県松戸市を札部分を画像加工しています

超高齢化社会 ゲームで体験

介護について学ぶ千葉県立松戸向陽高(松戸市)の福祉教養科の生徒が、超高齢社会を体験し、課題解決を促すゲームに授業で取り組んだ。同校では例年実施していたグループホームなどでの校外学習が、新型コロナウイルスの影響でできなくなり、代替策としてゲームを取り入れた。

生徒が体験したのは、松戸市の一般社団法人「コレカラ・サポート」が開発した「コミュニティコーピング」と名付けたゲーム。「コーピング」は「対処する」という意味で、参加者が協力し、地域住民の抱える悩みを解決していく内容だ。

「妻が病気で亡くなり、その後体調が優れず夜もなかなか眠れない(60代男性)」「障害のある息子と同居。自分が死亡した後はどうなるのか(70代女性)」など、具体的な悩みを抱える人がターンごとに盤上に現れ、参加者は訪問診療医やカウンセラーといった専門職の「処方カード」を使って解消していく。悩む人が一定以上残るとゲームオーバーになる。

授業ではボードゲーム版を使い、福祉教養科1年の生徒たちが5人1組で話し合いながら進めた。参加した笹本優生さん(15)はゲームを通じて「寄り添った介護ができる」と満足そうだった。

← 信濃毎日新聞 (8月5日掲載)

介護の悩み盤上で対処

松戸向陽高生ボードゲーム授業

介護について学ぶ県立松戸向陽高(松戸市)の福祉教養科の生徒が、超高齢社会を体験し、課題解決を促すゲームに授業で取り組んだ。同校では例年実施していたグループホームなどでの校外学習が、新型コロナウイルスの影響でできなくなり、代替策としてゲームを取り入れた。



協力してゲーム「コミュニティコーピング」をする松戸向陽高の生徒。松戸市を(名札部分を画像加工しています)

生徒が体験したのは、松戸市の一般社団法人「コレカラ・サポート」が開発した「コミュニティコーピング」と名付けたゲーム。「コーピング」は「対処する」という意味で、参加者が協力し、地域住民の抱える悩みを解決していく内容だ。

「妻が病気で亡くなり、その後体調が優れず夜もなかなか眠れない(六十代男性)」「障害のある息子と同居。自分が死亡した後はどうなるのか(七十代女性)」など、具体的な悩みを抱える人がターンごとに盤上に現れ、参加者は訪問診療医やカウンセラーといった専門職の「処方カード」を使って解消していく。悩む人が一定以上残るとゲームオーバーになる。

授業ではボードゲーム版を使い、福祉教養科1年の生徒たちが5人1組で話し合いながら進めた。参加した笹本優生さん(15)はゲームを通じて「寄り添った介護ができる」と満足そうだった。

← 東京新聞 (8月9日掲載)